

『夢の通ひ路物語』における先行物語撰取の方法一面

——六条の君物語の創作基盤——

女 道 一 百 八 十 子

はじめに

『夢の通ひ路物語』はいわゆる中世王朝物語の一作品である。成立は室町時代に下ると目されるが、この時代には類を見ない六巻に及ぶ長編物語である。そのなかに、「六条の君」という女君に関わる物語が挿話的に語られる。六条の君は、本作品の男主人公一条権大納言が、一時想いを寄せた女性で、大夫監という夫に連れ戻される途中で入水自殺を図り、はかなくなってしまう。この一連の物語は、本作品の本筋に大きく関わるわけではないが、入水譚の系譜に連なる物語としても注目される要素が少なからずあると思われる。

物語において入水しようとする姫君といえは、まずは、『源氏物語』の浮舟や『狭衣物語』の飛鳥井の女君が想起されることであろう。『源氏物語』の強い影響下に成立したと考えられる中世王朝物語にあつては、これらの影響をまず考えることができよう。『夢の通ひ路物語』におけるいわゆる「源氏取り」は、すでに指摘されてい

るように、『源氏物語』本文をそっくり取り入れている部分もあり、かなりあからさまな源氏引用の態度がうかがえるものである。それらに比して考えれば、この六条の君関連の物語（以下、六条の君物語と呼ぶ）は、明らかに浮舟巻を引いたと思われるほどの表現の一致を見ない。一方で、『伊勢物語』や『大和物語』からの影響を思わせる章句も有する。これらのことから、六条の君物語には、作者の先行物語撰取の方法の一端を垣間見ることができると思われるのである。小稿では、六条の君物語の入水場面焦點をあてて、作者の創作基盤にせまりたいと考える。

一

六条の君は巻四にはじめて登場する。主人公の異母姉である対の君が母代わりとなって世話をしている姫君である。もともとは六条に住む少将の姫君で、内参りも望んでいたが父が早世してかなわず、母と二人で暮らしていたところをなれば強引に筑紫の大夫監の妻にされてしまう。その夫のもとを逃れて、対の君とともに右大臣邸で暮らすようになったところ、主人公に懸想されるわけである。

はじめ、女房の目を介して「いとわかしく、うつくしうもてしづめたるけはひなやましげにて」³物語に登場した姫君は、最後まで権大納言に心からうちとけることなく、どこか暗い陰を漂わせたまま、再び夫に連れ戻される途中で死んでしまう。

この六条の君物語について、工藤進思郎氏は、

狭衣の愛人である飛鳥井姫が道成に連れられて九州へ下向する途次、唐泊にて投身するという記事（『狭衣物語』巻一）によるが、『源氏物語』において、玉鬘が肥後の大夫の監にしつこく言い寄られた話（玉鬘巻）も踏まえられていると指摘された。また、塩田公子氏は、

その（六条の君の）引用者注）造型の中に、飛鳥井の君を介して、『八重律』の姫君などの、中世の物語の姫君の姿が透き見えてくる。

と指摘される。両氏の指摘は妥当なものであろう。ここでまず、『狭衣物語』との類似を確認しておきたい。

- (1) 六条の君が大夫監に強引に筑紫に連れ戻されようとする
- (2) 権大納言の御衣を形見にして嘆く
- (3) その知らせを受けて権大納言は悲嘆する
- (4) 六条の君は歌を遺して入水を図る

という物語の展開は、全体的に飛鳥井の女君の物語を下敷にしていると考えられよう。表現のうえでも、男君（権大納言と狭衣）が「胸ふたがりて」悲しむ点は同様で、また六条の君の、

かく物うきさまにてただよひあくがれんも弥見ぐるし。いかにしてかかるついでに身も波にまかせせん

という決意と、飛鳥井の女君の、

かく憂きを知らぬ命のながさにていかさまにせんとすらむ」と思ふにすべき方なければこの海に落ちや入りなまし」

という心境とは通い合う。ただし、飛鳥井の女君が欺かれて筑紫行きの舟に乗ったために、狭衣に連絡のとれない状況にいるのに対し、六条の君物語では紀伊の守が使いとなって権大納言と文の贈答をする点は、大きな違いである。が、素材としての扇や衣が形見として大きな役割を果たしている点に類似が認められよう。

二

中世王朝物語を見渡すと、『八重律』『木幡の時雨』『松陰中納言物語』などに、入水しようとする姫君が登場する。いずれも、入水しようとするまでの心情は飛鳥井の女君と通い合うもので、結果も入水を果たすことはない。

とりわけ入水の際の歌の影響が大きい。『八重律』の姫君の歌、つこの国にはのあしをふく風のそよかゝりきと君につたへよ思ひきやかきあつめたる言の葉を底のみくつとなしてみむとはや、『木幡の時雨』の姫君の歌、

七夕のあふせはよそになしはて、底のもくつとなるぞかなしきは、それぞれ、飛鳥井女君の歌、

早き瀬の底の水屑となりきにきと扇の風よ吹きも伝へよを意識したものと考えてよいであろう。

森下純昭氏の「入水譚の系譜——狭衣物語を中心に——」によれば、入水する物語の型に、帝への思慕に殉じる猿沢の池伝説と二人の男にはさまれて死を選ぶ生田川伝説の二類型を認めたとうえで、飛鳥井

の女君の入水には両型の合成を読み取ることができるといふ。つまり、飛鳥井の女君が入水を決意する心中に、それまでの物語（生田川伝説の延長に成る『源氏物語』浮舟の物語や『住吉物語』）には見られない、狭衣に対しての操を守ろうとする新しい動機が認められ、それは猿沢の池の采女の延長に位置づけられるといふのである。ひるがえって、中世物語の女君たちを見渡すと、彼女たちの入水のひきがねは、意に添わぬ男の求婚であり、それを拒むための入水であることが読みとれる。となれば、いずれも、飛鳥井の女君の物語の影響下にあり、構想面においても描写面においてもその域を出ていないと思われるわけである。

『夢の通ひ路物語』の場合も、物語のおおまかな筋が『狭衣物語』によっていると思われるばかりでなく、このような飛鳥井の女君に見られた新たな動機をやはり認めてよいように思われる。

三

その一方で、やはり『源氏物語』の浮舟を想起させる本文もある。何よりも入水を決行したという点は浮舟と同じである。

六条の君が入水間際に遣した歌は、紀伊の守によつて伝えられた。紀伊の守は、その事実を女房の手紙によつて知り、手紙文を引用しながら以下のように報告する。

「着給ひぬる衣の袖におよびの血して下と書きて

波風も此世つきぬとひびきそふかねの岬に今ぞたへぬる

とかやはべりし

この歌は、浮舟が最後に詠んだ歌を踏まえているものと思う。

鐘の音の絶ゆるひびきに音を添へて我が世尽きぬと君に伝へよ
いまいる場所「金の岬」が、音の一致から読経の「鐘」の連想を呼び、
鐘の音の絶える響きに合わせて泣く声をあげたという浮舟の歌を、
暗い夜の海上での波風の響きに読み替えて、今まさに死のうとする
我が身を一首に表現しているのである。

六条の君の夫の名「筑紫の大夫監」には、にわかには「源氏物語」の玉鬘が想起されよう。そして、入水の場所「金の岬」は、『源氏物語』においては玉鬘巻に一例見出せる地名であり、玉鬘が筑紫下向の折に通り過ぎる場所である。

六条の君物語における『源氏物語』撰取は、玉鬘巻と浮舟巻とを取り合わせたものである。すぐさま玉鬘を連想させ得る設定を持ち込みつつ、最期に入水するところ浮舟をも髣髴とさせる。そして、浮舟を連想させることによつてこそ、二人の男に挟まれた女君という側面を強める結果になっている。それは、『狭衣物語』に及ぼした『源氏物語』の影響を見すえただうえで、それとは異なる『源氏物語』撰取を目指したということでもあろう。

四

ところで、浮舟巻には『伊勢物語』からの引用が散見される。六条の君物語において、『伊勢物語』の同じ章段からの引用が見える

のは偶然の一致であろうか。例えば、浮舟巻には、二人の男からの手紙を見て悩みを深める浮舟の姿が描かれる。そのうち、薫への返事には、次のようにある。

つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまさり
て

六条の君物語においては、女君が海を眺めてひとりこつ場面。

よにたつぎなくもこぎわかれぬるかなと、なみだぐみて、身さ
へ流るゝとかや、ほのかに打ちこち給ふぞ、

「身を流る雨」は第一〇七段。「身さへ流るる」も同段で、昔男が女に替わって詠んだ歌（あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへながらと聞かば頼まむ）の一句を踏まえる。相手の男の「涙河袖のみひちてあふよしもなし」と詠んだのを受け、涙の河があふれ御身までも流れるということを耳にいたしましたなら頼み申しましょう、と返したものである。六条の君はこの引用により、いま強引に大夫監に連れ去られた身がまさに自分の涙の河で流されてしまいうたと言っているものと解釈できよう。

ほかにも、「すける物思ひ」(第四〇段)の歌の一句「ありしにまさる」が共通するし、浮舟巻の「もの思う人の魂はあくがるなるものなれば」と六条の君物語の「我玉の迷ひ出てもがな」は、ともに「魂結び」(第一〇段)を意識したものと見える。

一方で、『源氏物語』にはない『伊勢物語』の引用も見出させる。はや日もくれて、あまたの船どもつなぎなどするも、げに、心

から、なにわにつけて悲しう、思し出づる事数々なり。人をしづめて、子ひとつばかりに、やおら起きて、まつそこはかと思ひ給へれば、雨打ちしきりて波の音にたち通ひぬるも、夜の景色はいとおどろくし。うつるかたなく思しなりにし御心地にも、今はと思ひ定め給はんほど、又悲しう、かゝらんとは、誰かは露ばかりもたどらせ給はめ、せめてとちめのほど、だに、我玉の迷ひ出てもがなと、恋しき御心の余りて弱げに泣き給ふ。

「人をしづめて子ひとつばかりに」とは「狩の使」の段(第六九段)にある。斎宮が夜中に男の寝所を訪ねる場面の描写である。六条の君は、今まさに死のうとしてるのであるが、その時に至って、最後に彼女の心の中にあるものは権大納言への恋情なのである。死に際してなお、自分の魂が迷い出たあの人のもとへ行きたいと思う、そうした女の燃える思いは、大胆にも自分から男の寝所を訪ねた斎宮に通じるものがある。

さらに、先に引用した入水に際して遺した歌は「およびの血して」書かれたものであった。この表現は、「梓弓」の段(第二四段)を思い起こさせる。待ちくたびれて別の男と結婚しようとする女のもとへ昔の男が帰ってくる。男は新しい夫に親しむよう言い残して去る。女は後を追うが、「およびの血して」歌を書き付け息絶える。

ほかにも、「しのぶ山」(第一五段)の引歌によって、人妻との恋であることを再確認させている例が見える。

こうした『伊勢物語』からの引用表現によって、六条の君の死は、

本来許されない権大納言への一途な想いを全うしたものと同一面を見せかけてくるのである。さりげなく織り込まれたわずかなフレーズではあるが、『源氏物語』にはない大胆さや「血」という語の衝撃性を含んだものであり、実に有効に働いていると思われる。

すなわち、『狭衣物語』に見られた操を立てるといふ動機を、ここでは、六条の君の一途な恋心のほうを強調することによって表現している」と読めるのである。

五

これまでに取りあげてきた物語の入水しようとする女君との決定的な違いは、六条の君がここで本当に死んでしまったことである。

浮舟も飛鳥井の女君も、そして、中世王朝物語の女君たちも、入水しても助けられるか、入水を果たせないままであった。が、六条の君は、その直後に死体で見つけられるのである。物語は、彼女がまさに水の中に身を投じる瞬間を語る。

此の世の限りにたけく心をおこしてつぷりと落ち入りぬ。
浮舟巻にはその描写はなかった。

ところで、この知らせを受けた権大納言の心情はこう語られる。

我こそちぬとやささだとや名にしづまんと、いふかひなくおほしゆるも、けしからずや。誠に、池のたまもと言ひしむかしも、只今のやうに思しやりけり。

これらの章句は、前者が生田川伝説を踏まえ、後者が猿沢池伝説

を踏まえたものであることは明らかである。どちらも、女が入水を語る語であることは共通する。

後者は、『大和物語』第一五〇段にあり、既に『狭衣物語』に、「池の玉藻」と見なし給けん帝の御思も、中へ、目の前に、いふかひなくて、忘れ草も繁りまさりけん。

と、それに言及する表現が見出せる。

ところが、前者については、少し気になることがある。『大和物語』第一四七段には「ちぬ」という語は男の名前として書かれているが、「やささだ」とは男の名として見えない。

むかし、津の国にすむ女ありけり。それをよばふ男ふたりなむありける。ひとりはその国にすむ男、姓はうばらになむありける。いまひとりとは和泉の国の人になむありける。姓はちぬとなむいひける。

『大和物語』の第一四七段はこのような書き出しであり、二人の男の名は「うばら」と「ちぬ」なのである。さらに、この物語の典故を『万葉集』に求めてみても、「見菟原処女墓」歌一首並短歌(二八三)には「智奴壯士」「宇奈比壯士」とあるばかりである。

『源氏物語』浮舟巻には、入水しようとする浮舟が次のように昔に思いをはせる記述がある。

昔は懸想する人のありさまのいつれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身をなぐるためしもありけれ

ここに想起された「昔」について、現在の注釈書の多くは、『万葉

集』卷九の真間の手児名・うはら処女や、同じく『万葉集』卷十六
桜見など、二人の男の板挟みとなって入水あるいは経死した女の伝
承を指摘している。一方で、中世の源氏注釈の類に目を向けると、
『河海抄』『岷江入楚』などは『大和物語』の第一四七段をまず引
用し、その後、『万葉集』卷九を引く。『紫明抄』『花鳥余情』は
『万葉集』卷一六桜見を引く。他の書はそのいずれかの形になら
たものとなっている。ともあれ、「ちぬ」と「ささだ」とを二人の男の
名としているものはない。

『夢の通ひ路物語』には、この部分に頭注があり、次のように書
かれている。

引歌 万葉集九 田辺福麿

いにしへのささだ男のつまどひしうなひ乙女のおきつきぞこ
れ

引歌 前に同じ

つかのうへの木の枝なびけりきくがごとちぬおとこにしよる
べかりけり

むかし、津の国芦屋の里に住人有。うなひ乙女といふ女なりけ
り。それを二人壯士いどみあらそひけり。男の名、一人は智努
といひ、独はささだといひけり。二人ながら心ざしのおなじ様
なりしかば、女おもひわづらひて、生田川に身をなげしとなり。
二人のおのこ共、おなじく自殺したりし事、花山院のつくらせ
給ふ大和物語にあり。されば、爰にて、女はうなひ乙女になぞ

らへて、ちぬ男とやさき男ともいわれてうせやせんとなり。

少なくとも、本作品の本文・注ともに「ちぬ」「ささだ」は並ぶ二人
の男ととらえているのである。そのような資料を同時代の文献に探
すと、一条兼良の『歌林良材集』（日本歌学大系「別巻七」の「菟名
負處女の奥禰事、付生田河の水鳥を射事」の項に、

萬九いにしへの篠田をこの妻戀にうなひをとめのおきつきぞ

これ 田邊福麿

同 蘆のやのうなひをとめのおきつきをゆきくにみれば音のみ
しなかる 同

同 つかの上の木の枝なびけりきくがごとちぬ男にしよるべけ
らしも 同

右三首ながら長歌の反歌なり。歌の心は、昔津の國あし屋の里
にうなひをとめといふ女あり。それを二人の壯士いどみあらそ
ひけり。男の名、獨をばちぬ男といふ、獨をばさ、だ男といひ
けり。男の心ざし、いづれもひとしかりければ、女おもひわづ
らひて、おやにいとまをこひて、つひに自害しぬ。其時ふたり
の男もおなじく自殺しければ、〈中略〉 又花山院のつくらせ
給へる大和物語にも、此事みえたり。〈以下大和物語ヲ引用〉
とある。この本文と先に記した頭注の文章とは構成が近似している。
まず『万葉集』の歌に解説を加え、『大和物語』にもあると説く。
頭注が付された時期は不明であるが、兼良の時代と重なるかそれ以
後であることには違いない。つまり、本作品成立のころには『万葉

集』卷九の歌について、このような解釈はなされていたわけである。

ちなみに、『大和物語』の津の国の女が入水する場面、本文には

つぶりと落ち入りぬ

とある。六条の君入水と全く同じフレーズである。つまり、作者の視界に『大和物語』も入っていたということであろう。

おわりに

六条の君物語の構想に、浮舟の物語や飛鳥井の女君の物語が影響を与えていることはいまさら言うまでもあるまい。とりわけ、飛鳥井の女君の物語が及ぼした影響は大きい。けれども、本作品の作者は、『源氏物語』や『扶衣物語』の創作基盤に決して無頓着だったわけではないのである。それぞれの物語が影響を受けた、さらに先行する伝説や物語についての教養を持ち合わせた上での創作であることが窺える。それらの教養をいかに組み合わせ、どのような形で取り込むかという点に工夫がなされたのである。

さらに、『伊勢物語』や『大和物語』の引用或いは言及の姿勢は、中世の古典注釈の姿勢と重なる面を持っているように思われる。王朝物語を読み解くためにその創作基盤を明らかにしていく注釈の営みと、あらゆる教養を集めて新たな物語を生み出していく創作の営みとは、あるところで重なりあうものであったのではあるまいか。六条の君物語は、その重なり合う基盤のうえに、生み出されたものであるように思う。

〔注〕

- (1) 工藤進思郎氏「『夢の通ひ路物語』の成立追考——伏見殿千首歌（引歌）と『源氏物語』の依拠本文をめぐって——」岡山大学法文学部学術紀要」四〇 昭五四・一二。
- (2) 工藤進思郎氏「中世物語における『源氏物語』の摂取に関する一考察——『夢の通ひ路物語』の場合——」『源氏物語の探究』3 風間書房 昭五二・一一。
- (3) 『夢の通ひ路物語』本文は、古典研究会叢書『夢の通ひ路物語』（汲古書院 昭四七・一〇）による。ただし、歴史的仮名遣いに改め、仮名の清濁・句読点・引用符等は私に付した。
- (4) 福武書店刊『夢の通ひ路物語』解題。
- (5) 『男と女の夢の通ひ路』『國文學』第三五卷第一号 平二・一。
- (6) 本文は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。
- (7) 本文はいずれも『鎌倉時代物語集成』（笠間書院）による。
- (8) 『中古文学』第一〇号 昭四七・一一。
- (9) 『夢の通ひ路物語』現存本には、本文上欄余白に頭注が存する。本文と同筆で、内容から判断して転写によるとの見方が有力である。執筆者・付された時期は不明。本文と注とがともに記されている物語の形態は極めて珍しく、『源氏物語』の古注釈を思わせる。

——あんど・ゆりこ、広島大学大学院博士課程後期在学——